
夕焼け天の川

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕焼け天の川

【Nコード】

N1026N

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

このまま死ねればどんなに心地よいかというまどろみに浸りながら、ベンチで日向ぼっこをしながら空き缶を握りつぶした。アルミ缶がミシシという音をたてながらへこむ。眼を思い切りつむったら涙が流れてしまいそうな程、弱っていた。というのも、路頭に迷っていた。生きる手段に悩んでいた。ついでに言えば、生きる気力も失っていた。つまり、死にたかった。

そういう男が希望を取り戻すまでのお話。ひとりよがりな解決だから他人はあまり出てきません。つまり、本当のところでは解決していないわけなのですが、とりあえずその時点までしか書いていません。

このまま死ねればどんなに心地よいかというまどろみに浸りながら、ベンチで日向ぼっこをしながら空き缶を握りつぶした。アルミ缶がミシシという音をたてながらへこむ。眼を思い切りつむったら涙が流れてしまいそうな程、弱っていた。というのも、路頭に迷っていた。生きる手段に悩んでいた。ついでに言えば、生きる気力も失っていた。つまり、死にたかった。

だけど俺は俺自身が死ねないことをわかっている。俺は昔から度胸が無い。

だから殺されない限りは死ぬことはない。だから、このまま生き続けることになるのだ、この虚無的ななんの価値も無い世界で。ひたすらに前進しないクロールでもがき続けることしかできないのだ。いや、クロールなんてもんじゃない。犬掻きをしている。犬掻きで前に進むことが出来ない。

やけに天気は良い。良いのは天気だけだ。青空。入道雲。今は夏。セミがどつかでうるさく鳴いてる。俺だっでうるさく泣きたい。だけど俺がそんなことをしたら不審者に思われてしまう。セミよりも不遇な扱いを受けている気がする昨今。シニタイ。でも死ねない。もちろん家庭もあった。だけど今はもう家庭はなくなった。何故だかって？理由は語るまでもないが、簡単に言ってしまうえば愛想をつかされたということなのだろう。なんて空しいんだ、人生って。ベンチから立ち上がる。眼前に噴水。ふと思い立つ。噴水の中に入れば涼しいだろうな、と。

スーツ姿のままだったけど、構うもんかってアルミ缶を放り投げながら、噴水へと足を進めた。近づくに連れて水流の音が激しく耳に障る。だがその代わりにセミの喧しさは遠ざかる。俺はじつと噴

水を見つめた。そして、笑いかけた。微笑んだ。噴水に。

「あはははははははははは」

気が付くと笑っていた。腹を抱えて笑っていた。通り過ぎる人たちはみんな俺に冷たい視線。優しさなど欠片も混ざってはいない視線。みんなが俺に向けるのは恐怖と哀れみの視線。

『おまえもか』

といっているような視線もある。そう、結局噴水の前でのたうち叫ぼうとも、全身を血で真っ赤に染めたりしない限りは、人が注目してくれたりはしないのだ。助けてくれたりもしないのだ。こんな風におかしくなってしまうた男性など、そこら中にたくさん存在しているからみんなどうでも良いのだ。『ああ、またか』っていうことなのだ、みんな。

噴水の水流に手を突っ込む。思い切り。だが呆気なく手は水流に弾かれて、その勢いで俺は体ごとよたよたしてしまって、そのよたよたの体勢を整えることも出来ないままに地面に尻餅をついてしまった。

どっかから笑い声が聞こえる。いくつもの。

噴水が耳にひどく煩わしい。その間を潜り抜けるような笑い声たち。馬鹿にしていた。

「やめろ」

一人ぶつぶつと繰り返し「やめろ」と呟きながら、その場で頭を抱え込んでしまっとうずくまった。このまま陽が落ちて通り魔にでも刺されてしまえばいい。どうせ未来なんてないんだ、先に転がっているのは虚無だけなんだ、死ねないだけなんだ、俺はもう死んでいるんだ、助けてくれないか、少しでもいいから、手を出さだけいいんだ、そしたら俺は犬掻きするよ犬掻き、頑張るよ、前進はしないけどね、全身を逞しくフル活用するよ、前進はしないけどね、たまに後退もするけどね、あ、選手交代お願いしまーす、そうだなスペック的にはベッキヤムくらいのスペックに選手交代よろしくってな感じで、はは、感じてよろしく、さて、そろそろ通り魔が近づ

いてきてもいいんじゃないかな、ってまだお昼か、入道雲もちっとも動いていないや太陽だって暑いままじゃねえかこの日光まじうぜえってな感じだよー。

通り魔に刺されることは諦めた俺は立ち上がり、周辺を見回した。見ると、俺に注目していた人が何人か目を反らした。若者とか年寄りとか関係なく、結構な人数が俺に注目していたらしい。もちろん、俺に見られた瞬間みんな目を反らしたけど。怖かったんだろうね。俺も俺のことが怖いよ。どう思う、みんな。

って瞬間にまた笑い声に頭を締め付けられた。ぎゅぎゅっと絞られる感じで頭が笑い声で満たされていく感覚が、せしめてくる。「やめろ」呻きながら、うわ言のように繰り返しながら、蒼色の空を見上げると、飛行機が煩わしい音をたてて空を切り裂いている。白い線を発している。

羽ばたいている。前進している。どこまでいくのだろう。別の国にいくのだろう。

その場にいろのがいたたまれなくなった俺は、発狂したフリをすることでみんなの注目を集めることに快感を覚えながら噴水から足早に立ち去っていった。

みんなの哀れみの視線の感覚と、笑い声の煩わしさは、消えないままに。

いつまで歩き続けたのだろうか。随分と長いこと歩き続けたような気分だった。

閑静な住宅街へと到着していた。何処から犬の吠える声。

今はもう夕暮れ。どこかで子供たちの声。俺を嘲笑っているのだった。

俺は俯きながら、嘲笑う彼らをどうするべきかと一瞬頭を悩ませたが、その次の瞬間に嘲笑う彼らに対する恐怖感が襲い掛かった。

立ち止まる。夕陽を見る。

燃え上がる真っ赤な太陽。住宅街の全てが赤く燃やされている。

恐怖感。……恐怖感。

恐怖感……恐怖感……恐怖感。

「空に燃え上がる太陽。俺はもうやっていけないよ」

一人眩きながら、近くにベンチがあったのでまた座った。一息ついてから、自動販売機が近くにあったのでそこから飲み物を購入。冷たいコーヒーでカフェインを摂取。一口、二口、三口。…。

「俺はもう、やっていけないよ」

もう一度繰り返しながら、その缶を潰そうと思ったが潰れない。アルミ缶ではなくスチール缶であるからだ。俺は思う。無力だ。

「…」

力を込めた。握力には昔から自信がある俺だ。スチール缶と言っても所詮は缶。潰すことなんて容易なはずだ。本気を出せば、潰せる。

ぎゅっと、力を込める。筋肉を盛り上がらせる俺の気迫。ぎゅ、

ぎゅとスチール缶を。

だが、びくともしない。

スチール缶は一切へこまない。そして、スチール缶は俺をこう嘲笑うのだった。

「雑魚」

耳を疑った。だが、スチール缶はもう一度繰り返す。いや、二回。

「雑魚、雑魚」

これは幻聴ではないと思った。だからもう一度耳を澄ます。子供たちの笑い声も聞こえるが、それに混じって。スチール缶から。

「雑魚、雑魚、雑魚」

けたたましい怒り。夕陽よりも燃え盛る炎。怒りの情熱。情熱の怒りけたたましい。雑魚、雑魚、雑魚雑魚雑魚雑魚。計六回もの雑魚がスチール缶より子供たちの笑い声と混じりながら届いてきたというのである。俺はもう一回耳を澄ます。するとまだまだ聞こえて

くる。

「雑魚雑魚雑魚雑魚」

躊躇ない計十回の「雑魚」というわけであって怒りを感じずにいられないわけもないじゃないかと怒号をその場で発した。子供たちの耳障りな笑い声は途端に止んだ。ついでに言うと、夕陽も落ちて真っ暗になった。あたりは真っ暗闇の世界に途端に包まれ、スチール缶だけがやけに真っ赤に輝いている。スチール缶だけが夕陽に照らされている。俺も含めて世界のほかの全ては闇に包まれたのに、スチール缶だけなんでお前は真っ赤なんだ。燃えてるんだ。そして俺に雑魚と言うのだ？

「雑魚、雑魚雑魚」

そんなに伝えなければいけない言葉か、と疑う。お前はそんなに俺が嫌いか、とも疑う。

メンタルが弱い俺をそんなにいじめて楽しいのかお前は、と思う。ため息。ため息。ため息。俺はため息を何度もついて、スチール缶に再び力を込める。真っ赤な情熱を思いっきり右手で握りつぶそうと試みる。最初はちっとも駄目だった。だがどうということだろうか、俺の思いが握力に伝わったのだろうか、スチール缶は直にへこんだ。俺の手の握力によってスチール缶はアルミ缶のようにへこんだ。へこんだ。

「…雑魚って言うことはこれで出来ないぜ」

嬉しさのあまりベンチから立ち上がり、思いっきり夜空へ向けてスチール缶を放り投げた。そのスチール缶に少し残っていたコーヒーの残りが頭にかかったりして嫌だったが、そんな細かいことなどどうでも良いほどに俺は歓喜。嬉しさのあまりもう一缶コーヒーを買って飲んだ。

カフェインを摂取。その後に半分くらい中身がまだ入っているスチール缶を右手で握り締めれば直にへこんでくれたので、俺は歓喜をさらに溢れさせて爆発させた。つまりどうということかという中身がまだ入っているのに宙に放り投げたのである。

それによって雨。一瞬だけ茶色の雨が俺に降りかかった。コーヒーの雨である。口を大きく開けていたが一粒もコーヒーは舌に触れることはせず、スーツに茶色い染みがくっ付くだけだったのは非常に残念だった。

だが俺は歓喜をやめない。そのまま何だかテンションが上がってきたので、もう一本のコーヒーを自動販売機へと買いに走った。とことこと小刻みに足を動かし、自動販売機へとお金を入れてボタンを押そうと思った。が、売り切れていた、コーヒー。いや、違う。全てに赤い点灯が。

全部売り切れ…？

「なんでやねん」

茫然とした表情のまま無気力な突っ込みを入れると、小銭の返却口に手を伸ばしたのだが小銭が戻ってこない。「あれ？ あれ」とよく確認しても小銭は戻ってこない。最悪だ。

「ああああもう」

叫びながら天を仰ぐともう夜。星がそこら中に散らばっていて砂粒のように煌いていて。そんな人によってはロマンチックに見える光景は俺にとってはただの光。輝き。心の余裕がないのだった、はっは。ざまあしろ！

「どうすっかなあ」

言いながらベンチへと着席。今日からここをホームポジションにしたいという願望を頭が唱えている。正直言っただけを動かすのがだるい。年齢のせいがあるいは気力の問題なのか。カフェインはちっとも活力を与えてくれないから困るというものだ。

さっきまで鰻登りだったテンションはみるみる降下し、糸を切られた人形になってベンチにもたれかかる。ベンチに身を預けて、このままここで夜を明かして朝になった頃には死んでればそれはそれで楽なのに、という思いも巡る。だけどそんな惨めな死に方もな、という思いも巡る、が、こんな俺には惨めな死に方がお似合いではある。俺はまだ真っ当な死に方などという幻想を見ているのだ。な

さけない。

「貴様にはまだそんな煩惱があるのかっ」

ベンチで横になりながらひとりごちる。夜空の砂粒をぼーっと眺めながら、俺も遂にこんな所まで落下したのか、という実感が自然と昇り上がってくる。こんな感情昇り上がって欲しくないのに、情け容赦なく、スチール缶の『雑魚雑魚雑魚』という呪文から始まり、過去から今までの様々な恥ずかしい失敗がフラッシュバックされる。「う、うう、ううう」

ベンチの上でのた打ち回り、なんとかこのフラッシュバック、というか、悪夢を振り払おうとする。こんなもんは体に纏いつく脂肪と同じくらい邪魔だ。もっと煩惱で脳味噌を満たさなければ悪夢に押しつぶされてしまう。よーし、煩惱煩惱。

こうして俺の頭はやがて煩惱でせしめられて行き、何時の間にか意識を失っていった。

夢の中へ行ったのでした。

しかし夢の中で眼を覚ますと坊さんがいた。

ツルツル！はげ頭に太陽を閉じ込めている。そんな彼は片手に木刀である。普通、竹刀じゃねえの、って思ったが夢の中のせいだろうか、彼はいたって普通の表情で木刀を持っている。俺は辺りを伺って今がどんな状況なのか探る。

「きみは40回くらいは『俺』と言った。そのことに対しての罪を感じ罰を受けるが良い」

「俺と言った？」

「ほら、また言った。君は俺俺うるさい」

坊さんはツルピカ頭を接近させてきて、木刀で殴ってくるのかと思いきや頭突きをかましてきた。

頭の中に衝撃音。視界がぶれてよたよた。俺は座布団に尻もちを

ついでしまった。

「いてえ」

言いながらぶれる視界をおさめようと首を何回も振る。次第におさまる。

見えてきたのは、黒い巨大な影。いやいや、影なんかではない。実物のそれは天井にまで辿りつきそうな程巨大。

仏壇だった。俺は、仏壇に四方を囲まれているではないか。

「…また、俺、と言ったね？」

語尾を上げることと言葉の重みが増している。お坊さんは木刀を構える。

何の構えと言えはいいのか、武道に詳しくない俺にはわからないが、言うなれば『ガ○ツ』の構えと言ったところだろうか。お坊さんめっちゃカッコいい構えである。太陽を反射させている坊主頭。

そもそも何ゆえ太陽が？ここ屋内じゃないの？と思って上空を見れば、あらなんということでしょう、天井は取り付けられているのだが、何故か中央だけポツカリと穴が開いていて、そっから太陽がこんなにちはと挨拶しているのである。坊主頭を照らすための太陽。燃える太陽。

「この仏壇には君の遺影」

坊さんが、言う。そして木刀の先端で、それぞれ四方の仏壇の、閉じていた蓋を開けてみせる。

「あっ」

そこには俺の遺影が四つ。それぞれ喜怒哀楽の表情で全部別の顔つきをしている。俺はそんな写真を撮られた覚えは無い。だが、間違はなくどれもこれも俺の顔だった。四つの遺影に四つの表情の俺だ。坊さんがその遺影に近づき、木刀で思い切りそれを突く。

遺影にあった喜の俺は、木刀でぐちゃぐちゃにされた。言いながら坊さんは呻く。

「俺、俺、俺俺俺。まったくもってうるさいし騒がしい。まったく、遺影を撮るのが本当に面倒だったんだよ、表情を変えなくちゃいけ

ないんだから。四方向分作るのが儀式の決まり！　なんでそういうことになったかというと、君は、通り魔に刺されて死んだからだよ」

平然とした調子で、淡々と述べてくる。俺は耳を疑った。

「…死んだ？　死んだのって、俺？」

坊さんはしかし俺の質問には答えず、怒の遺影を木刀で突つつく。怒の表情の遺影がぐちゃぐちゃにされる。嫌な気持ちになりながら、坊さんと木刀から距離を置かなければ殺されるだろうか、と怖くなる。だけど、逃げ場があるわけでもない。天井から飛べれば逃げられるけれど。

そうこうしている内に哀の遺影もぐちゃぐちゃに。

残されたのは、俺の背中にある楽の遺影のみとなった。息を呑む。坊さんが、俺の目の前に立つ。『ガ〇ツ』の構えをする坊さんは叫ぶ。

「貴様の顔面と、楽の遺影、どちらを壊されたいか、答えろ！」

般若の面を被ったかのように、坊さんの表情は恐ろしいほどに歯がむき出しにされる。いや、実際に角さえも生えてきた。歯も牙と言ってイイほどに伸び上がり、口角は引きつっている。

俺は恐怖と、あと慌てるあまりに、

「うわ、うわあああわあわ」

とひたすらに絶叫しながらとにかく死にたくない思いで、横っ飛びをした。その瞬間に坊さんは木刀を思い切り突き出す。勢いをつけて。なぜか、肉が突き刺されるような、生々しい音が鳴った。

遺影、楽がぐちゃぐちゃにされたのだ。これで喜怒哀楽すべての遺影がぐちゃぐちゃにされた。

残るは俺自身だけ、ということだろうか？　それとも楽を選択したから助かるのだろうか、と思った時に、般若の面の坊さんは、俺を射る。血走った両眼で。

「これを見ろ」

般若の面が俺を手招きする。招かれて助かるものと疑いつつも、立ち上がる。

彼は彼自身が突き刺した楽の遺影のほうへと指を出している。俺はその指に従って、楽の遺影を見る、と。

「ああ、あああ、あああああ」

全身いたるところが縮み上がる思いが駆け巡って、腰を抜かした。楽のぐちゃぐちゃにされている遺影から、流れているのは血。血液。とめどなく流れる。

般若の面はケタケタと笑い、腰が砕けている俺を嘲笑っている。

「たかが血が、そんなに怖いか？ 俺くん。：貴様も今からこうなる」

木刀を握り締める彼。俺に向けて構え。

そして。

「ごめんねえ」

やけにかっこいいイントネーションの謝罪の後。木刀が躊躇なく突き出される。

ずしゃ。

だが俺を庇う存在が、俺の顔面がぐちゃぐちゃになるのを助けてくれた。薄目だった目をハッキリと開くと、目の前に血を流している遺影。それは喜怒哀楽たちだった。ぐちゃぐちゃにされたはずの遺影たちが、血を流しながらも俺の代わりに突き刺されてくれたのだ。

だが残念無念。その遺影を貫通して、俺の顔面へと木刀は突き抜けてきた。額に、額に、木刀が。突き抜けてくる。：遺影が予想し

ていたよりも木刀は長かったということだ。

なんで顔面が貫かれているのにこうやって思考できているのかよくわからないが、とにかく俺は顔面を貫かれた。

「あっははははは。顔面五枚抜きじゃあああ」

般若面の轟く笑い声を耳に残しながら、俺の意識はフェードアウトしていったのであった。

何時の間にか再び夕焼け。世界が抱擁されているのは夕焼けであり、つまりどういうことかというところと一日ほど眠っていたということだろうか？ コーヒーを被ったりしたのは夜だ。それからどうしたのだっけ…？ 眠って、それで、そうだ夢を見た。顔面五枚抜きされる夢だ。

俺はベンチから体を起こし、住宅街の空で漂う夕焼けにしばし見入った後、よく一日もこんなところで眠っていて職質もされなかったものだ、と意外に思ったりしながら一息をつく。

子供たちの笑い声が遠くからまた聞こえる。耳に入り込んでくる笑い声。しばらく聞いているとそれは嘲笑に聞こえてくるが、そんなことはどうでもいいさっさと何かしよう、と思ったが何をするべきかわからない。

「だりいなあ。なんかしないとなあ。でもなんもないしなあ。どうしようどうしよー」

欠伸をする。

その瞬間に夕焼けが終わり、夜が訪れる。

唐突な夜の始まり方だな、と疑問に思い眉をひそめていると、子供たちの笑い声も途端に聞こえなくなり、なんだかこんなこと前も無かったつけというデジャヴ感が生じた。その時に目の前に真っ赤なスチール缶が現れたのである。俺の視界のまん前にスチール缶が。

「夕焼けに染まっている？」

そう、夕焼けに染まっているスチール缶。それは俺が昨日夜空に放り投げたスチール缶。「雑魚」を繰り返す失礼なスチール缶。礼儀がまるでなっていないあいっだ！

「雑魚雑魚」

また言ってくるので思い切り蹴り飛ばしてやった。缶蹴りだ。缶蹴りなんていつ振りだろうか、まあいいそんなことはどうでもいい。スチール缶は闇に吸い込まれていった。

「はあ。なんか意味不明」

不思議の国にでも入り込んでしまったのだろうか。

よけいに事態は混濁していく。

まず通り過ぎたのは夕焼けに染められた一台のバイク。やかましいエンジン音を鳴らしながら、なぜか乗っている人間は夕焼けに染められておらず、夕焼け色なのはバイクだけだ。それが俺の目の前を横切っていく。

そして爆発。俺のそうだな、だいたい二十メートル先くらいで爆発したのである。乗っている人間はもちろん死んでしまったに違いない、なぜならば凄まじい爆発だったからだ。

もくもくと空気を昇り上がっていく煙は黒煙ではなく、それもやはり夕焼けに輝いていた。夕焼けに輝く煙がもくもくと夜空を昇り上がっていく。何だか綺麗だったので、しばらくみとれていた。

辺り中が夕焼けの煙に包まれる。

「ごほっ、ごほっ、む、むせるう」

気管に入り込んでくる煙をむせ出すと夕焼けが零れる。それくらい夕焼け色の煙はそこら中に充満を始めていた。いい加減に煩わしかったので煙から逃れる。何十メートルか走ると、煙の渦から逃れることが出来た。

「ぷはあ」

ぜえはあ言いながらよたよたして走るのをやめる。振り返ると、夕焼けの煙が天にまで届く勢いで夜空を駆け上っていて、まるで塔

のようだった。バベルの塔のように高みを目指しているのであった。もちろん、昇り上がっている途中で風に吹き飛ばされてしまっている。高く積み上げられたものはやがて崩れ落ちるのだ。盛者必衰っていう。

だが夕焼けの塔は風に吹かれることによって夜空に、川を形作るのだった。

夕焼けの川。

なかなか圧巻だった。天に朱色の川だなんて、初めて見る。

俺は何時の間にか希望を胸の内に湧き上がらせていた。価値の無い世界で見るかつて無い光景は絶望した人間にも光を感じさせてくれている。夕焼けの事故が天に昇り川を作り、俺に希望を与えているなんて不思議としか言い様が無いが、細かいことを気にしても仕方が無いのであろう。俺はきつと、幸運だったのだ。夕焼けの川はきつと、俺にだけ見える希望なのだ。

天に手を。

まだ生きれる。

夜空に向かって、そう誓った。

（後書き）

短編として書きましたが、将来はこれ続けることで長編にしたい
とも思っています。

これはこれでハッピーエンドで良いのですが、もっと摩訶不思議な
世界にしたいという願望があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1026n/>

夕焼け天の川

2011年11月13日14時21分発行